

先島諸島における貿易陶磁の 動態とムラの成立に関する課題

Dynamics of the Ceramics Trade and Issues Related to the Establishment of Villages on the Sakishima Islands

池谷初恵

IKEYA Hatsue

はじめに

①遺跡の出土陶磁器の様相

②先島諸島の貿易陶磁にみる画期と様相

③貿易陶磁からみるムラの成立と終焉に関する課題

おわりに 課題と今後の展望

[論文要旨]

本論は先島諸島と奄美地域で出土する貿易陶磁の数量分析データに基づき、各遺跡の出土量の消長や種別の変化に言及し、琉球列島の南北における貿易陶磁の動態を論じたものである。別稿の報告において、貿易陶磁の編年に基づきⅠ～Ⅵ期、小期を含め7段階に時期区分を行ったが、それぞれの遺跡をこの時期区分に照らし、先島諸島における以下の4つの画期を想定した。1：貿易陶磁の出土量が増加する13世紀後半、2：貿易陶磁の出土量がさらに増加し、主体が白磁から青磁に変換する14世紀後半、3：遺跡により出土量の増減に特徴がみられる15世紀後半、4：一部の遺跡を除き多くの遺跡において出土量が激減する16世紀初頭～前半である。

これらの画期を踏まえて先島諸島の貿易陶磁の様相をみていくと、貿易陶磁が一定量出土する時期が沖縄諸島に比べて1世紀以上遅れることが明らかとなった。また、13世紀後半～14世紀前半に浦口窯系白磁・ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類など福建産粗製白磁が主体的に出土し、14世紀後半に白磁と青磁の劇的な逆転現象が起きる。

以上の先島諸島における貿易陶磁の画期と様相は、これまで琉球列島として一括りで捉えられてきた様相とは大きく異なるものである。この画期と様相は、先島諸島特有の「細胞群のように連結する石垣による屋敷割」をもつムラの成立・形成過程と関連することが予想される。

【キーワード】 先島諸島, 貿易陶磁出土量, 浦口窯系白磁, ビロースクタイプ, 細胞状石垣のムラ

はじめに

「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究⁽¹⁾」では、中世琉球の領域のうち、北・南地域の出土貿易陶磁の数量的な分析を行い、周縁地域におけるムラの成立・終焉に関する基礎資料を蓄積してきた。調査成果は本誌の「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」（以下「報告」と略記）に掲載した。本稿では、調査・分析データに基づき、主に先島諸島（宮古・八重山諸島）における貿易陶磁の出土数の推移および画期を整理する。また、それらと琉球列島北部に位置する喜界島の出土状況との比較を行い、南北地域の様相の違いを確認する。その上で、中世琉球の周縁地域の動態、ムラの成立に関わる課題を抽出しておきたい。

① 遺跡の出土陶磁器の様相

(1) 時期区分

「報告」では指標とする分類基準に基づき、Ⅰ～Ⅵ期の6期、小期を含めて7段階の時期区分を行い、各遺跡の時期別出土数を示した。各期の年代観は、指標とする分類・編年の年代に基づいているが、日本国内各地の消費地遺跡で確認されている出土状況を考慮し、若干の変更を加えている。

時期区分、年代、指標とする主な分類は以下の通りである。Ⅰ～Ⅴ期はおおよそ100年間の年代幅を設定したが、Ⅳ期はa・b期の2段階に分け、それぞれ50年前後の年代幅を想定している。Ⅵ期のみ短く、50～60年の年代幅である。

期	年代	指標とする主な分類
Ⅰ期	11世紀後半～12世紀中頃	青磁碗 A0 白磁碗Ⅱ・Ⅳ 白磁皿Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ
Ⅱ期	12世紀後半～13世紀前半	青磁碗 A1～6 青磁同安窯系 白磁碗Ⅴ～Ⅷ 白磁皿Ⅲ
Ⅲ期	13世紀後半～14世紀前半	青磁碗 B1・B0 青磁折縁皿 白磁碗ⅢⅨ 白磁碗Ⅲ浦口窯系 白磁碗・Ⅲピロースク 0・Ⅰ・Ⅱ
Ⅳ a 期	14世紀後半～15世紀初め	青磁碗 B2・C1・D1 白磁碗枢府系 白磁碗ⅢピロースクⅢ
Ⅳ b 期	15世紀前半～中葉	青磁碗 B3・C2・D2 青磁内彎系皿 白磁皿 B 染付碗 B
Ⅴ期	15世紀後半～16世紀前半	青磁碗 B4・C3・E1 青磁端反皿 青磁稜花皿 白磁碗 C 白磁皿 C1・C2・E 染付碗 C・D 皿 B1・C
Ⅵ期	16世紀中葉～末	青磁碗 E2 青磁菊皿 白磁皿 D 染付碗 E・F 皿 B2・E・F

以下、本稿においても「報告」と同じ時期区分を用いて検討していく。なお、本稿では小破片等により明確な分類ができず、「報告」の付表で「○○不明」・「○世紀、○c.」などと記載したものについては、厳密にⅠ～Ⅵ期の時期区分に入れることはできないが、該当する複数時期に案分して数量を計算している。たとえば、「ピロースク不明」や「13～14世紀」はⅢ期・Ⅳ a 期それぞれに数量を二分して追加している。ただし、該当する時期区分の一方の出土数が0である場合には、もう一方の時期区分のみに加算した。

(2) 先島諸島の遺跡における時期別出土傾向—発掘調査出土資料—

上記の時期区分に従い、先島諸島の4遺跡の出土貿易陶磁の出土数をグラフに示した。以下、グラフを参照し、遺跡ごとの出土傾向を概観する。各遺跡の概要については、「報告」にまとめたので、ここでは略す。

住屋遺跡（宮古島） 図1～3

I期は白磁碗Ⅳ類（図3-1）2点、II期は青磁碗同安窯系と龍泉窯系碗A類（劃花文）など17点で非常に少ない。III期では350点あまりと急増し、その8割を白磁が占める。最も多いのは浦口窯系の碗・皿⁽³⁾（図3-9・10・13）で、144点を数える。次いでピロースクタイプⅡ類（図3-5）が100点以上、そしてピロースクタイプⅠ類とピロースクタイプ0類⁽⁴⁾（図3-3・4）（田中2009a）が少量ある。一方で白磁碗・皿Ⅸ類はわずか4点である。青磁は、白磁に比べて少ないが、碗B0類・B1類や同時期の皿などが約70点あり、先島諸島では最も多い。

Ⅳa期では、青磁と白磁の出土数の比が逆転し、青磁が白磁の10倍近い数値を示す。青磁の主なものは碗D1類（図2-7）である。白磁はピロースクタイプⅢ類（図3-6）が46点出土しているが、III期に比べると激減している。III期とⅣa期の白磁の出土量の差は、ピロースクタイプⅡ類とピロースクタイプⅢの出土量によるものである。

Ⅳb期になると、さらに青磁の数が増加し、Ⅳa期の約4倍となる。青磁碗・皿の9割以上がD2

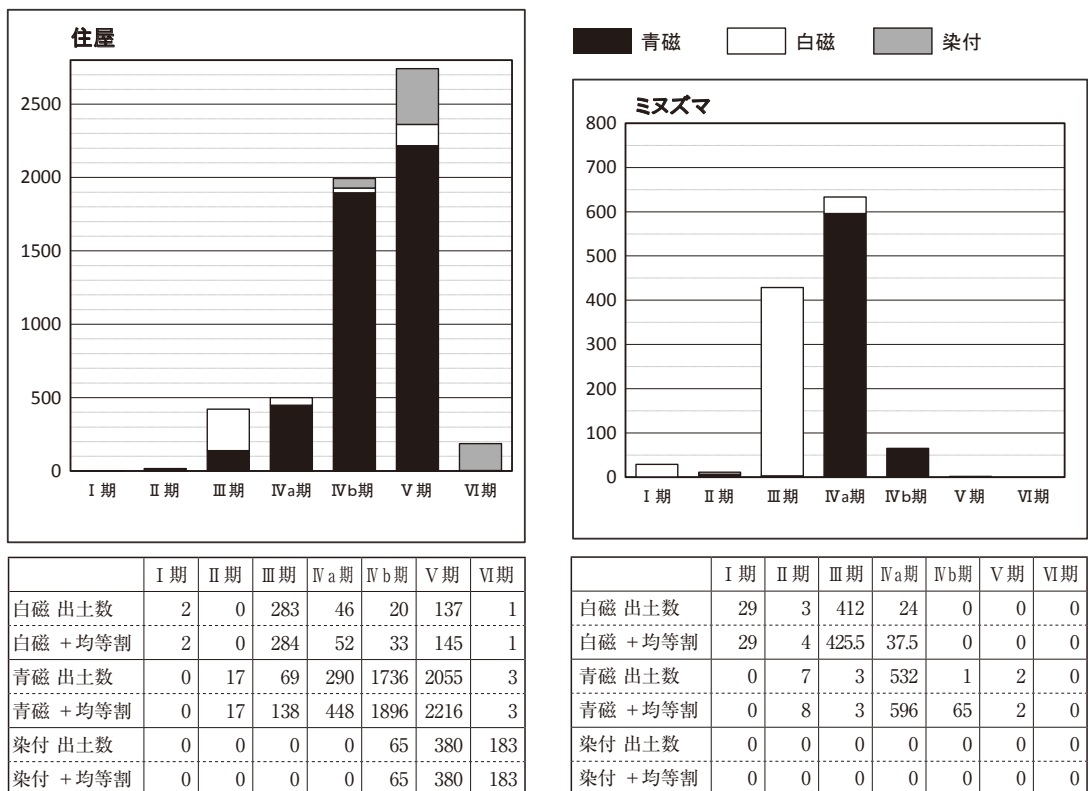


図1 住屋遺跡・ミズマ遺跡出土状況

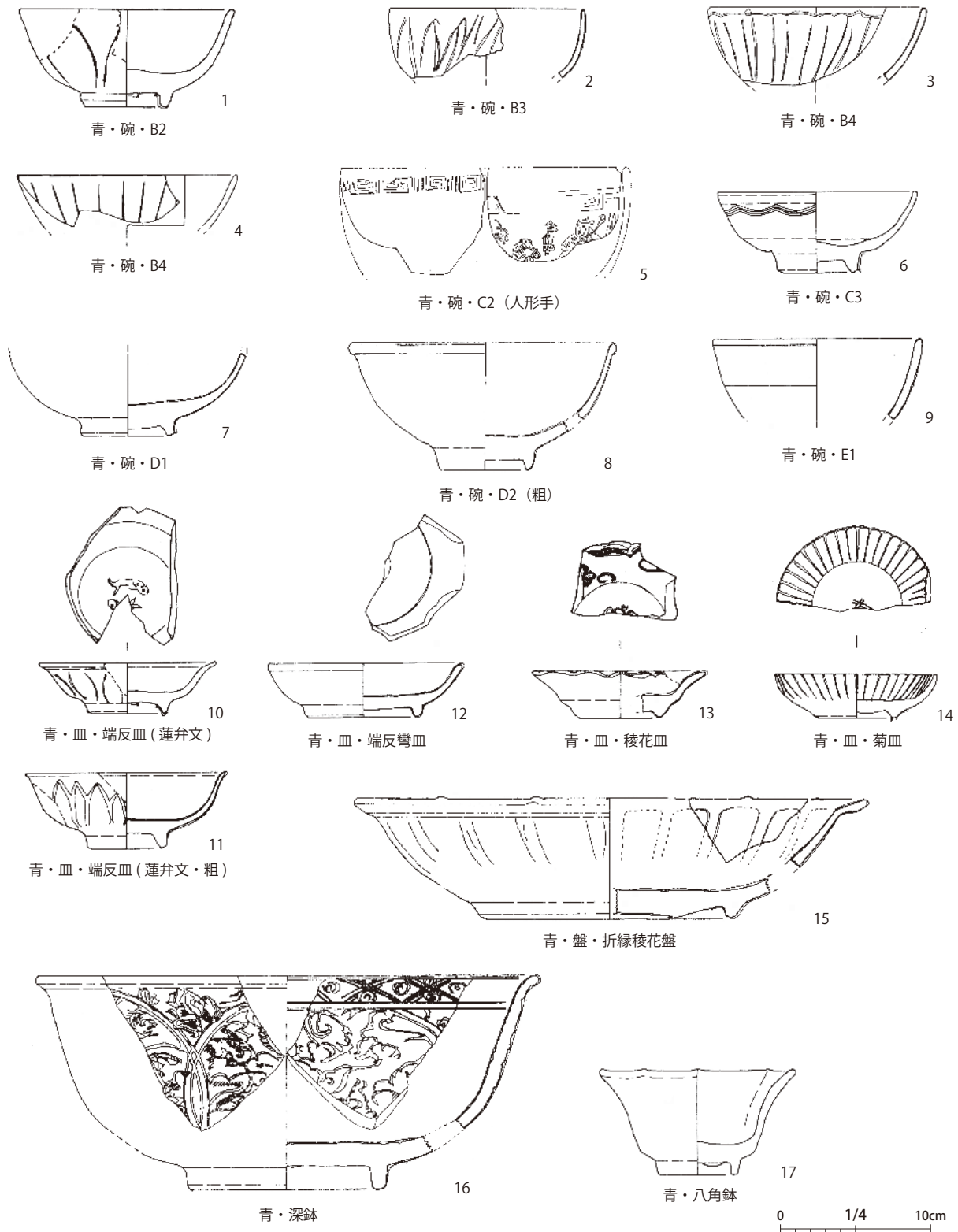


圖2 住屋遺跡出土貿易陶磁(1)

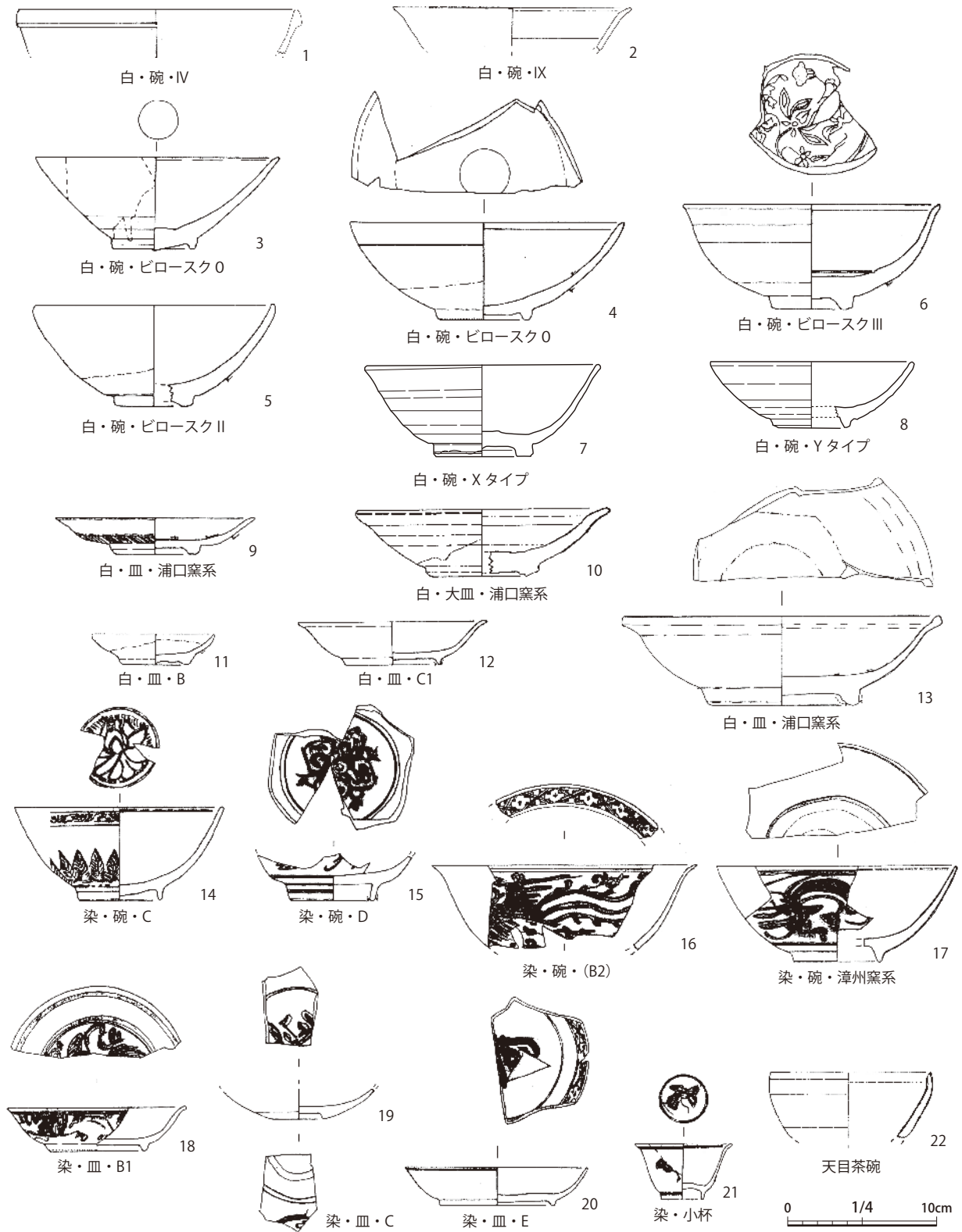


図3 住屋遺跡出土貿易陶磁(2)

類(図2-8)で、その他、碗C2類(図2-5)が少量ある。白磁は少ないが、皿・杯のB群(図3-11)が少量認められる。染付は碗B類が60点出土している。

V期はIVb期よりさらに増加し、本遺跡の最大出土数となる。全体の8割を青磁が占め、碗B4類(図2-3・4)とE1類(図2-9)が大半である。また、青磁稜花皿(図2-13)が200点以上出土していることも特徴である。白磁は皿C1群(図3-12)が131点あり、IVb期の白磁皿・杯B群より増加傾向がみえる。染付も出土量が増え、碗158点、皿134点を数える。住屋遺跡の染付の出土量は先島諸島で最も多い。分類別では、碗C群(図3-14)・D群(図3-15)、皿はB1群(図3-18)が多く、皿C群(図3-19)は少ない。

VI期の出土量はV期から急激に減少し、10分の1以下となる。青磁・白磁はほとんどなく、染付が主体となる。碗E群、皿B2・E群(図3-20)などのほか、漳州窯系の碗(図3-17)が89点出土している。住屋遺跡では、VI期の出土量は減少するものの、続く近世においても明朝末～清朝の貿易陶磁、肥前磁器などが出土しているので、中世から近世にかけて継続して営まれた遺跡であるといえる。

ミヌズマ遺跡(宮古島) 図1

I期は白磁碗IV類が29点出土しており、先島諸島で最も多い。II期は青磁碗A類と、白磁碗V類などが少量ある程度である。III期になると、住屋遺跡同様に白磁の出土量が急激に増える。浦口窯系・ピロースクタイプII類が多く、IX類が少ない傾向も住屋遺跡と同じである。

IVa期における出土量の増加、白磁と青磁の逆転現象も住屋遺跡と同じ傾向を示しているが、IVb期以降は様相が異なり、急激に出土量が減少する。V期は数点のみ、VI期の出土遺物は確認できなかった。ミヌズマ遺跡の集落は15世紀のはじめには終焉をむかえたと考えられる。

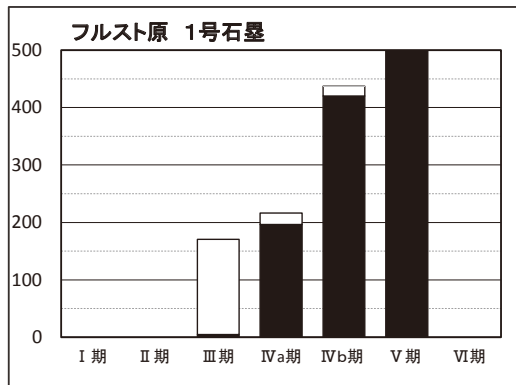
フルスト原遺跡(石垣島) 図4・5

フルスト原遺跡は、史跡整備調査に伴って発掘調査が行われており、このうち、1～5・10・15号石塁について、それぞれ「石塁」別に数量を調査した⁽⁵⁾。

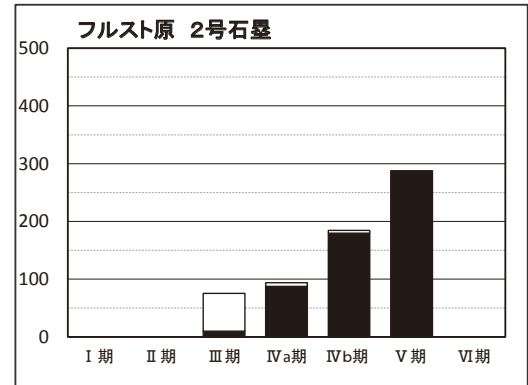
I期のものはなく、II期は4・5・10号石塁で青磁碗A類が数点ある程度である。III期から数量が増え、60～160点ほどを数える。主体となるのは白磁碗で、浦口窯系、ピロースクタイプII類が多い。青磁は少なく、碗B0類・B1類や折縁皿が数点程度である。なお、先島諸島の遺跡ではIII期の青磁が少ないことに加えて、白磁碗・皿IX類の出土が少ない傾向が顕著であるが、10号石塁においては白磁皿IX類が25点出土している点は注目される。

IVa期になると、いずれの「石塁」も出土数が増える。1・2号は微増であるが、その他の石塁は2.5倍～4倍の数量に急増している。青磁碗D1類を中心に青磁が大量に出土しており、白磁の数量と逆転する状況である。白磁はピロースクタイプIII類が出土しているが、10号石塁で59点と最も多いものの、その他の石塁では10～20点程度である。いずれの石塁においても、III期のピロースクタイプII類よりも激減している状況が認められた。

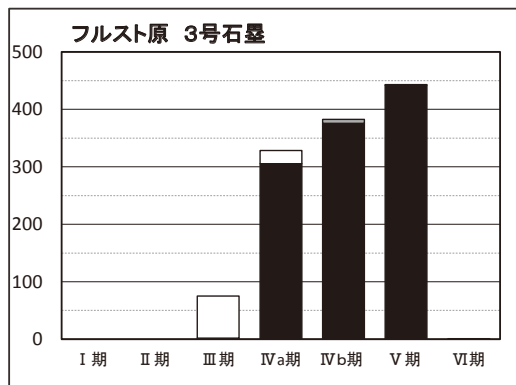
IVb期以降は石塁によって、出土量の増減の状況が異なる。IVb期、V期と出土量が増える1・2・3号石塁と、IVb期で減少し、V期で再び増加または横ばいとなる4・10・15号石塁、IVb期か



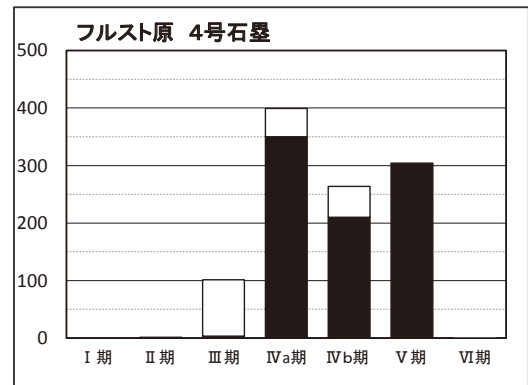
	I期	II期	III期	IV a期	IV b期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	164	18	15	0	0
白磁 + 均等割	0	0	166	20	17	0	0
青磁 出土数	0	0	4	185	208	312	0
青磁 + 均等割	0	0	4.5	196.5	420	513	0
染付 出土数	0	0	0	0	0	0	0
染付 + 均等割	0	0	0	0	0	0.5	0.5



	I期	II期	III期	IV a期	IV b期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	60	1	5	0	0
白磁 + 均等割	0	0	65.5	6.5	5	0	0
青磁 出土数	0	0	10	83	109	22	0
青磁 + 均等割	0	0	10	87.5	179.5	288	0
染付 出土数	0	0	0	0	0	0	0
染付 + 均等割	0	0	0	0	0	0	0



	I期	II期	III期	IV a期	IV b期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	73	23	15	0	0
白磁 + 均等割	0	0	73	23	17	0	0
青磁 出土数	0	0	2	291	146	227	0
青磁 + 均等割	0	0	2	305.5	375.5	442	0
染付 出土数	0	0	0	7	1	1	0
染付 + 均等割	0	0	0	7	1	1	0.5

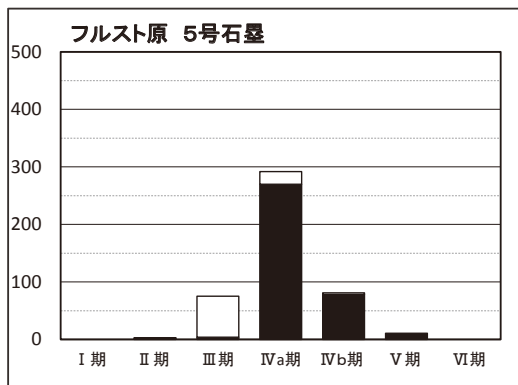


	I期	II期	III期	IV a期	IV b期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	98	21	25	0	0
白磁 + 均等割	0	0	98	49.5	53.5	0	0
青磁 出土数	0	1	3	338	210	298	0
青磁 + 均等割	0	1.5	3.5	350	298	304	0
染付 出土数	0	0	0	0	0	0	1
染付 + 均等割	0	0	0	0	0	0	1

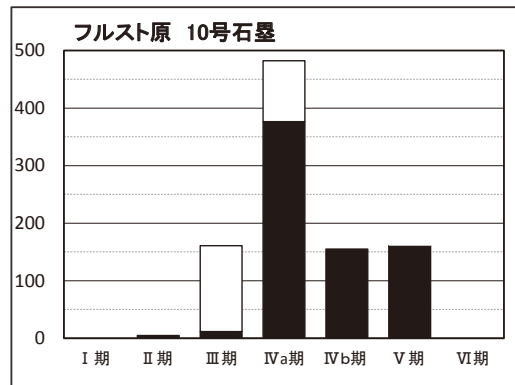
図4 フルスト原遺跡出土状況(1)

らV期に減少を続ける5号石壘との3つの消長パターンがみられる。⁽⁶⁾IV b期はIV a期と同様に青磁が多くを占めており、碗D2類が主体で、B3類やC2類も一定量認められる。白磁は少ないが、B群の皿や面取杯が少量出土している。染付は3号石壘で碗B群がわずかにある程度である。

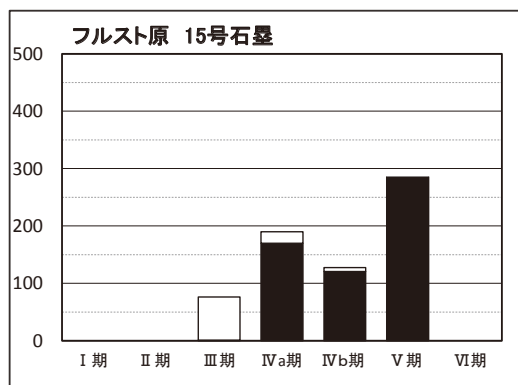
V期も引き続き青磁が多く、碗B4類と碗E1類がほぼ半々かB4類がやや多い状況である。青磁の稜花皿も15~20点ほど出土している。染付は非常に少ない。VI期は青磁・白磁ともなく、3・4・15号石壘で染付皿が1点ずつ出土しているのみである。



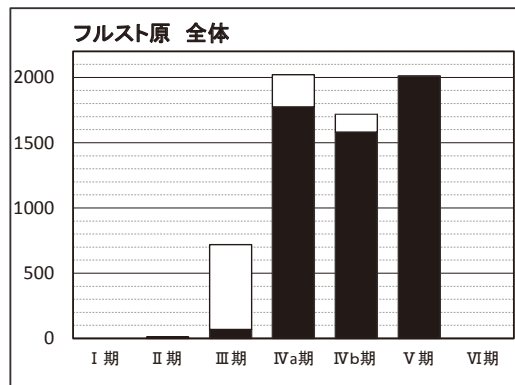
	I期	II期	III期	IVa期	IVb期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	70	22	3	0	0
白磁 + 均等割	0	1	71	22	3	0	0
青磁 出土数	0	2	4	226	32	9	0
青磁 + 均等割	0	2	4	270	78	11	0
染付 出土数	0	0	0	0	0	0	0
染付 + 均等割	0	0	0	0	0	0	0



	I期	II期	III期	IVa期	IVb期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	103	59	0	0	0
白磁 + 均等割	0	0	149.5	105.5	0	0	0
青磁 出土数	0	5	11	376	153	159	0
青磁 + 均等割	0	5	11.5	376.5	155	161	0
染付 出土数	0	0	0	0	0	1	0
染付 + 均等割	0	0	0	0	0	1	0



	I期	II期	III期	IVa期	IVb期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	75	20	7	0	0
白磁 + 均等割	0	0	75	20	7	0	0
青磁 出土数	0	0	1	168	91	258	0
青磁 + 均等割	0	0	1	170	120.5	285.5	0
染付 出土数	0	0	0	0	0	1	1
染付 + 均等割	0	0	0	0	0	1	1



	I期	II期	III期	IVa期	IVb期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	647	164	55	0	0
白磁 + 均等割	0	1	702	246.5	85.5	0	0
青磁 出土数	0	8	68	1685	971	1486	0
青磁 + 均等割	0	8.5	69.5	1775	1582	2008	0
染付 出土数	0	0	0	0	7	3	3
染付 + 均等割	0	0	0	0	7	3.5	3

図5 フルスト原遺跡出土状況 (2)

新里村遺跡 (竹富島) 図6～9

新里村遺跡は八重山の集落研究上、重要な遺跡である。花城井戸 (ハナクンガー) と呼ばれる湧水井戸を境に、「石垣」を伴わない12～13世紀の東側のムラ (新里村東遺跡) と、細胞状の連結した「石垣」で囲まれた屋敷跡を検出した14～15世紀の西側のムラ (新里村西遺跡) との2つの時期の異なるムラが存在するとされる。この遺跡の調査成果によって、「石垣」で囲まれた屋敷地の成立期が検討されている [沖縄県教育委員会 1990, 金武 1999・2015a・2015b]。

発掘調査は道路建設に伴うもので、東遺跡と西遺跡を横断するようにベルト状の調査区が設定された。今回の遺物調査では報告書と遺物の注記から出土地点を判別し、東村と西村に分けて遺物を集計した。⁽⁷⁾

新里村東遺跡においては、Ⅰ期は白磁碗Ⅳ類(図7-4・5)5点、Ⅱ期は白磁碗Ⅴ類1点のみである。Ⅲ期になると増加するが、そのほとんどは白磁で、浦口窯系(図7-7・8)、ビロースクタイプⅠ類・Ⅱ類(図7-9)など約50点出土している。浦口窯系とビロースクタイプⅡ類が多い傾向があり、フルスト原遺跡と同様である。青磁はB0類相当の小碗と皿が5点のみである。

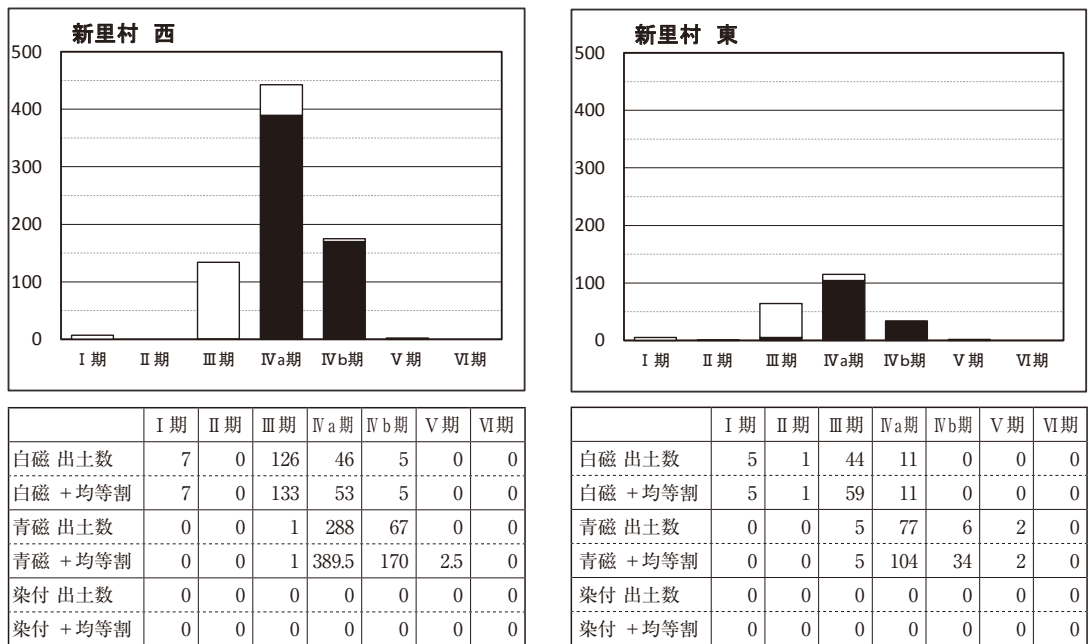


図6 新里村遺跡出土状況

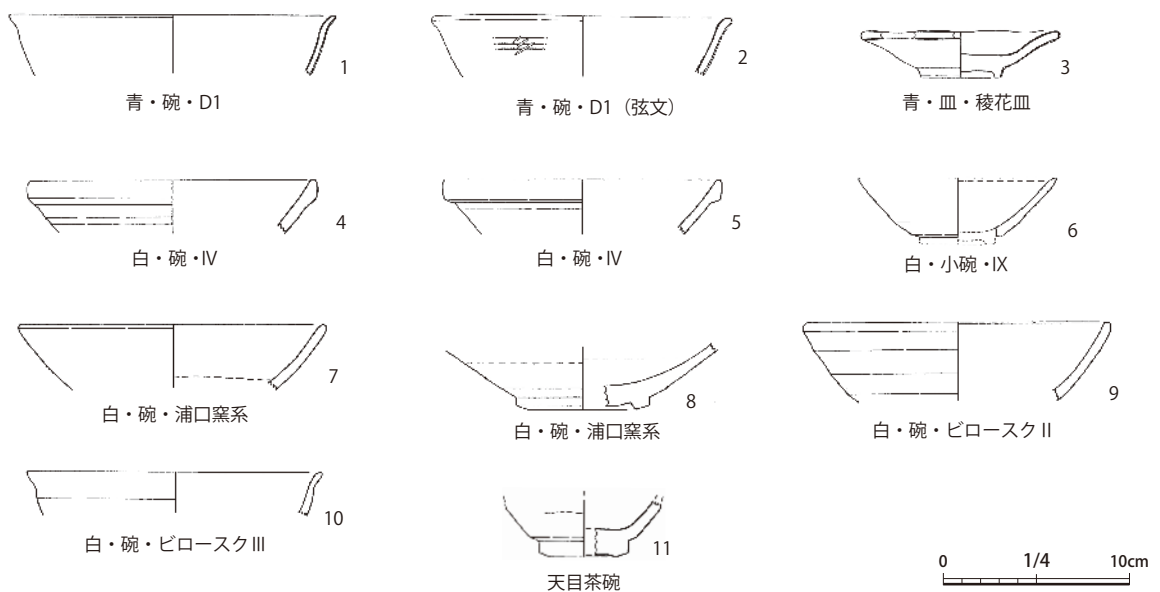


図7 新里村遺跡(東遺跡)出土貿易陶磁

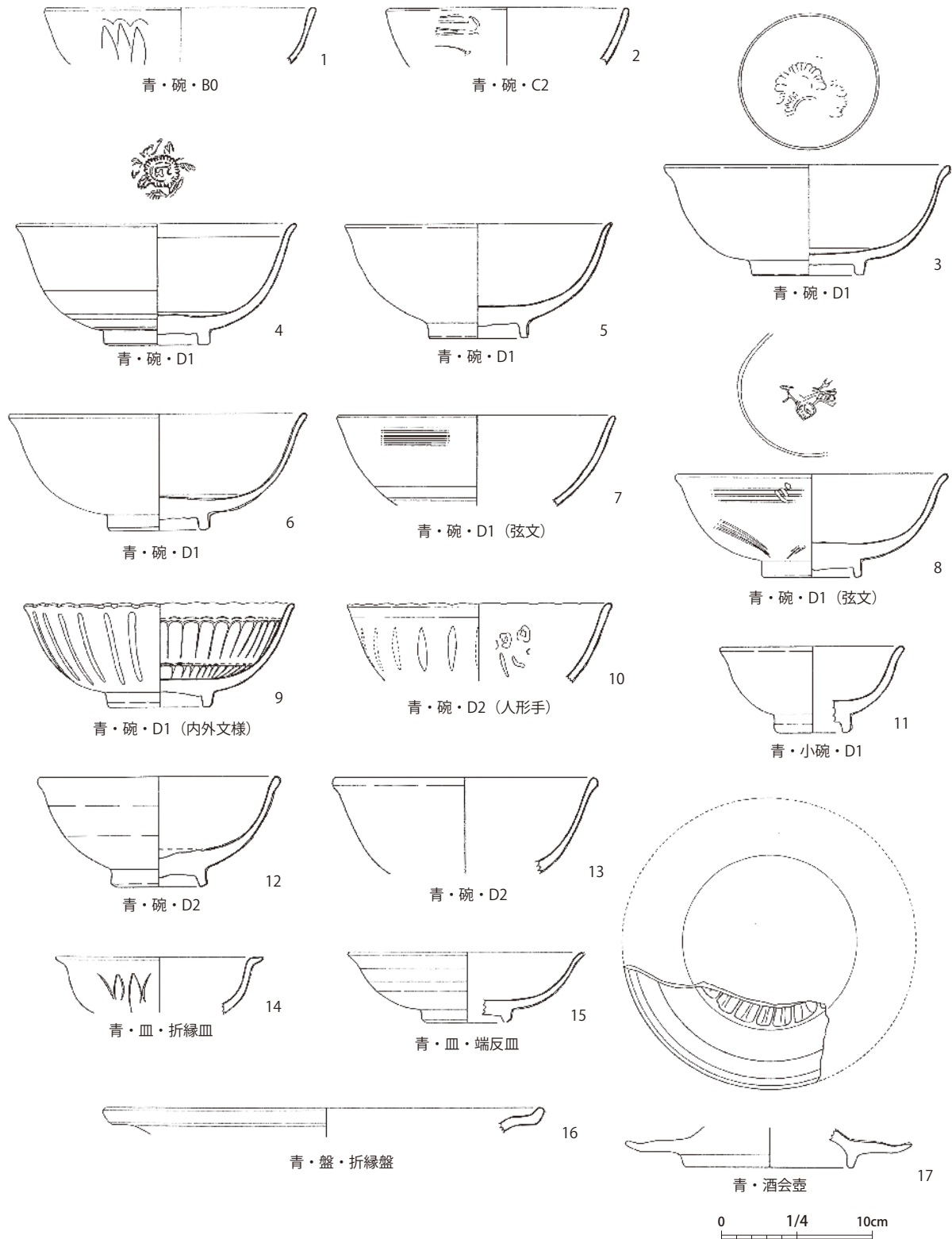


図8 新里村遺跡（西遺跡）出土貿易陶磁（1）

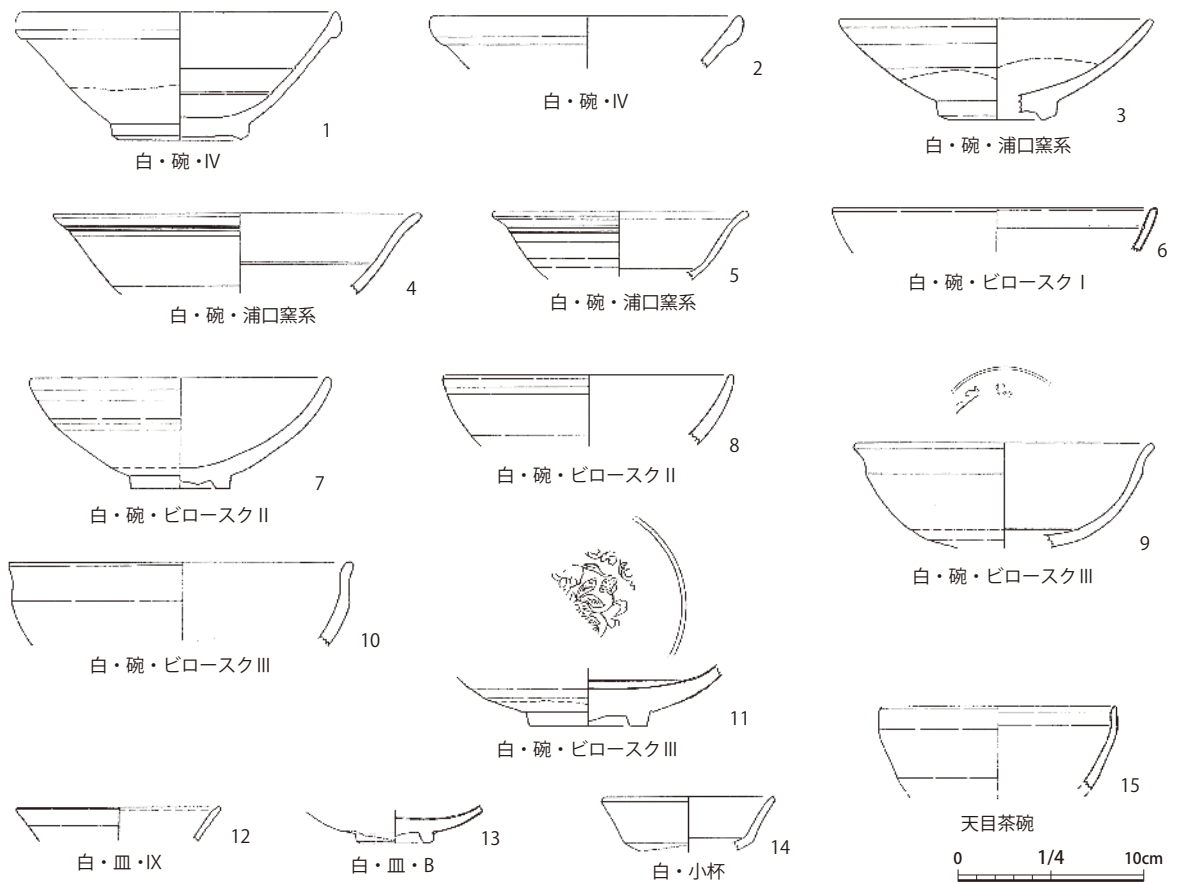


図9 新里村遺跡（西遺跡）出土貿易陶磁（2）

IV a期になると少し増加し、碗 D1 類（図 7 - 1・2）を主体に青磁が 8 割以上を占める。白磁は激減し、ピロースクタイプ III 類（図 7 - 10）が 18 点となる。IV b 期は IV a 期の 3 割弱に減少し、V 期は青磁稜花皿（図 7 - 3）1 点のみ、VI 期の資料はみられない。

新里村西遺跡においては、I 期は白磁碗 IV 類（図 9 - 1・2）が 7 点、II 期はなく、III 期で白磁を中心に増加する。III 期の白磁は、東遺跡同様に浦口窯系（図 9 - 3 ~ 5）・ピロースクタイプ I 類（図 9 - 6）・II 類（図 9 - 7・8）を中心に 130 点ほどで、ピロースクタイプ II 類が最も多い。

IV a 期になると、III 期の 3 倍近くに増加し、そのうち青磁が碗 D1 類（図 8 - 3 ~ 9・11）を中心に 9 割近くを占める。白磁はピロースクタイプ III 類（図 9 - 9 ~ 11）が約 50 点出土しているが、III 期のピロースクタイプ II 類に比べて減少している。IV b 期は IV a 期の 4 割ほどに減少し、V 期・VI 期は東遺跡と同様に、出土資料は皆無に近い状況となる。

以上、新里村東遺跡と西遺跡の貿易陶磁の出土状況を比較した。出土量の差はあるが、両遺跡とも、III 期から IV a 期にかけて増加し、IV b 期で減少する傾向は同じである。貿易陶磁の出土量を比較する限り出土数の多寡の差はあるものの、東遺跡と西遺跡の時期差を明瞭に認めることはできない結果となった。

(3) 先島諸島の遺跡における時期別出土傾向—採集資料—

以下の4遺跡については、発掘調査によらない採集資料であるため、資料的価値は低くなるが、数量は100点以上あり、これまでの遺跡との比較、石垣島・竹富島以外の状況を確認するため、検討してみたい。

美底御嶽周辺遺跡（波照間島） 図10

波照間島の北部落北側に位置する美底御嶽は、草分け家の屋敷跡と伝えられる場所である。この御嶽周辺ではかつて中世の陶磁器が多く採集され、ムラがあったと想定されている〔小野1999〕。ジョージ・H・カーが中世陶磁器を採集したのもこの一帯と考えられる。採集資料のうち中世陶磁器は、青磁481点、白磁62点、染付9点の計552点である。

I・II期の遺物はなく、III期は白磁の浦口窯系・ビロースクタイプII類が一定量出土する。青磁はB1類が1点のみである。IV a期は遺物量が急増し、青磁が9割近く占める。青磁はD1類が主体で、B2類がわずかに伴っている。白磁はビロースクタイプIII類が17点あるが、III期の量には及ばない。IV b期・V期と次第に減少傾向があるが、青磁が主体であることは変わらない。VI期は染付の漳州窯系皿が2点のみである。

伝ミシュク村跡遺跡（波照間島） 図10

伝ミシュク村跡遺跡は、波照間島ニシ浜に接する海岸部に位置する。波照間島の創世記伝説の地で、現在も祭祀が行われている。今回の調査の一環で、本遺跡の測量調査を実施した。後世に作られた祭祀の神道により分断されているものの、中世のムラの一部を確認することができた⁽⁸⁾。

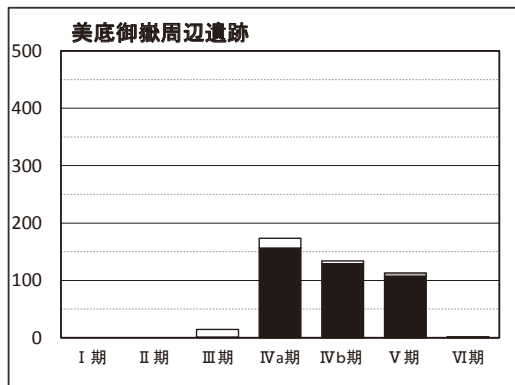
伝ミシュク村跡遺跡においてジョージ・H・カーが採集した中世の貿易陶磁は青磁159点、白磁10点、染付5点の総数174点である。I・II期はなく、III期から出現し、IV a～V期までの遺物が確認できた。各時期の青磁・白磁の割合などは、美底御嶽周辺遺跡と同様である。

古見海岸一帯—古見赤石崎遺跡・平西貝塚・古見旧村跡遺跡等—（西表島） 図10

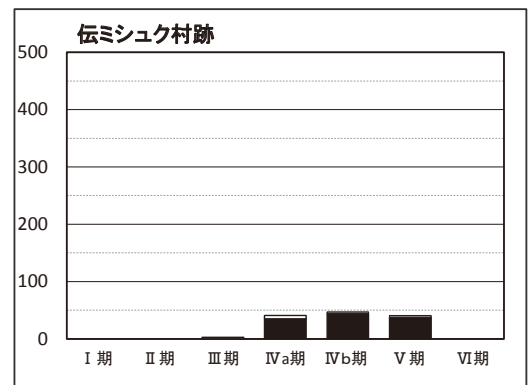
西表島西部に位置する古見海岸は、古見旧集落跡遺跡、平西貝塚、古見赤石崎遺跡などの遺跡が点在する。ジョージ・H・カーがこの一帯で1,000点を超える貿易陶磁を採集している。採集の際には「古見海岸」・「古見城跡坂」・「東部ピニシ海岸」などの地点名が記録されている。現在の遺跡名では、古見赤石崎遺跡や平西貝塚に該当すると考えられるが、古見旧村跡遺跡周辺も含まれる可能性もある。現在でも古見海岸では大量の陶磁器が採集できる。ここでは、古見海岸一帯の採集資料として一括して扱う。

I・II期の資料はなく、III期から遺物が見られる。III期は白磁が主体で、浦口窯系、ビロースクタイプ0類～II類が19点ある。青磁は碗B1類1点と同時期の皿1点あるのみである。

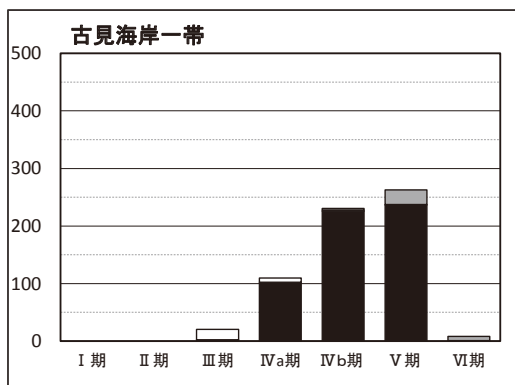
IV a期で急増し107点となる。青磁がとくに増加し、主体は碗D1類である。白磁はビロースクタイプIII類が6点あるが、前段階に比べて少なくなる。IV b期はIV a期よりさらに増加し188点を数える。IV a期と同様に青磁が多くを占め、主体は碗D2類であるが、C2類とB3類も一定量認められる。内彎皿や折腰丸皿などの皿類も増加する。V期でさらに増加し、200点を越える。やはり



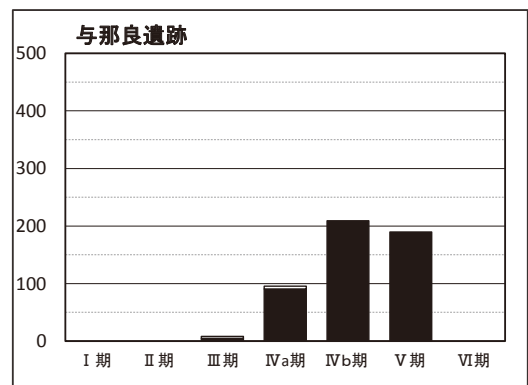
	I期	II期	III期	IVa期	IVb期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	13	17	5	0	0
白磁 + 均等割	0	0	13	17	5	0	0
青磁 出土数	0	0	1	110	73	97	0
青磁 + 均等割	0	0	1.5	156.5	129	107	0
染付 出土数	0	0	0	0	0	6	2
染付 + 均等割	0	0	0	0	0	6	2



	I期	II期	III期	IVa期	IVb期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	3	6	0	0	0
白磁 + 均等割	0	0	3	6	0	0	0
青磁 出土数	0	0	0	26	31	33	0
青磁 + 均等割	0	0	0	35	45	38	0
染付 出土数	0	0	0	0	2	3	0
染付 + 均等割	0	0	0	0	2	3	0



	I期	II期	III期	IVa期	IVb期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	17	6	2	1	0
白磁 + 均等割	0	0	19	6	2	1	0
青磁 出土数	0	0	2	101	183	195	1
青磁 + 均等割	0	0	2.5	102.5	225.5	236.5	1
染付 出土数	0	0	0	0	3	25	7
染付 + 均等割	0	0	0	0	3	25	7



	I期	II期	III期	IVa期	IVb期	V期	VI期
白磁 出土数	0	0	3	5	0	0	0
白磁 + 均等割	0	0	3	5	0	0	0
青磁 出土数	0	0	5	83	80	68	0
青磁 + 均等割	0	0	5	90.5	209	189.5	0
染付 出土数	0	0	0	0	0	0	0
染付 + 均等割	0	0	0	0	0	0	0

図10 採集資料出土状況

青磁が多くを占め、碗 B4 類と E1 類が主体で、稜花皿も一定量ある。白磁はなく、染付碗・皿が計 25 点出土している。VI期は激減し、青磁 1 点、染付 7 点の計 8 点のみとなる。

与那良遺跡（西表島） 図 10

与那良遺跡は古見海岸よりやや北部に位置する西表島の西海岸に面した遺跡で、旧与那良集落のあった場所と思われる。沖縄県教育委員会のぐすく分布調査で採集された資料を調査した [沖縄県

教育委員会1994]。資料数は青磁530点、白磁13点の計543点である。

I・II期はなく、III期も青磁折縁皿5点や白磁浦口窯系3点などで少ない。IV a期は碗D1類を中心に青磁が急増し、白磁はピロースタイプ皿類が5点程度となる。IV b期はIV a期よりさらに増加し、多くを青磁碗D2類が占める。碗B3類・C2類も一定量認められるが、白磁、染付はない。V期も若干増加し、青磁碗B4類、E1類、稜花皿、端反皿などがある。白磁、染付はない。VI期の遺物はない。

(4) 琉球列島北部地域の時期別出土傾向

今回、先島諸島の調査とあわせ、奄美諸島喜界島の以下の2遺跡の貿易陶磁の数量調査を行った。先島諸島の遺跡との比較のため、出土傾向を確認しておく。

大ウフ遺跡（喜界島） 図11・12

喜界島の城久遺跡群は、喜界島の海岸段丘（標高90～160m）の縁辺部に立地する8遺跡で構成される。I期（9～11世紀頃）、II期（11世紀後半～12世紀頃）、III期（13～15世紀）の3時期に区分されているが、多くの遺跡がII期に終焉を迎える中で、大ウフ遺跡はIII期まで継続することに特徴がある[喜界町教育委員会2013・2015a]。今回の調査の時期区分ではI・II期が城久遺跡群II期に、III～V期が城久遺跡群III期に相当する。

I期は白磁碗II類（図12-11）・IV類（図12-12・13）、皿II類（図12-18）・IV類が合計で84点ある。II期は少し減るが白磁碗V類（図12-14・15）・皿III類（図12-19・20）などがあり、加えて青磁は同安窯系碗や碗A類が少量出土している。III期は青磁碗B1類（図12-1・2）・B0類などが主体で、同時期の折縁皿（図12-9）もあり、II期より若干増加する。白磁は少なく碗・皿IX類が7点あり、ピロースタイプII類が6点出土していることは注目される。

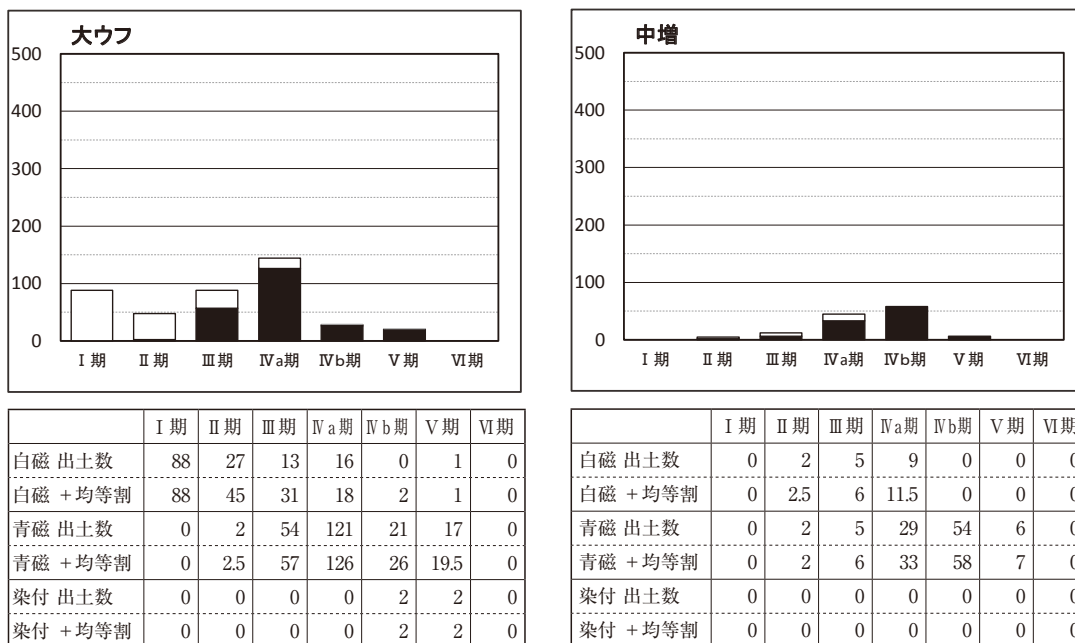


図11 大ウフ遺跡・中増遺跡出土状況

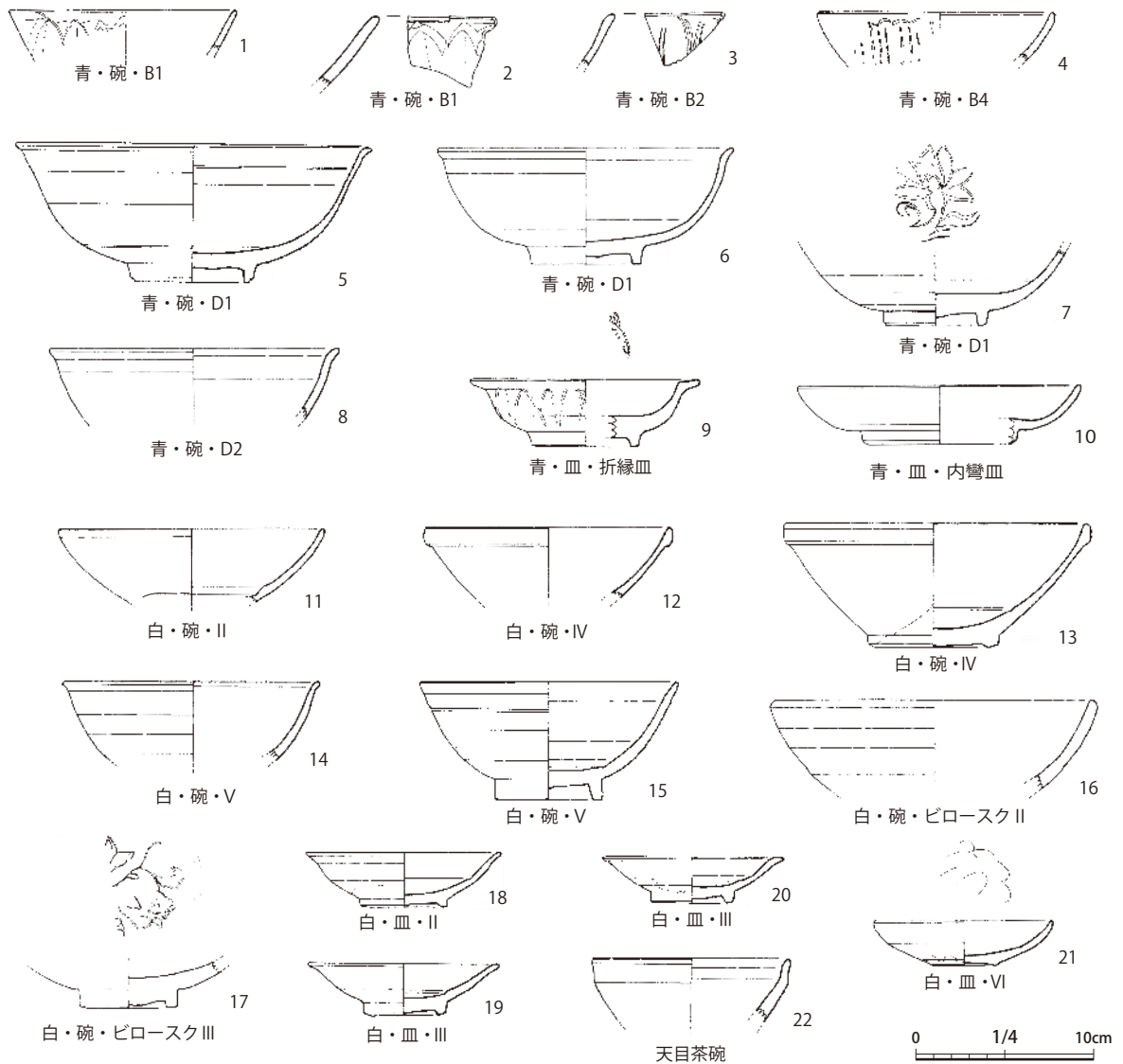


図12 大ウフ遺跡出土貿易陶磁

IV a 期が本遺跡で最も出土量の多い時期で、青磁は碗 D1 類（図 12-5～7）と相当する皿類、白磁はピロースクタイプⅢ類（図 12-17）が主体である。IV b 期になると激減し、V 期もほぼ同様に、この時期をもって遺跡は終焉を迎える。

中増遺跡（喜界島） 図 11

中増遺跡は喜界島の南側海岸に近い標高 20 m 前後の手久津久地区に位置する[喜界町教育委員会・2015b]。中増遺跡を含む手久津久地区では中世後半期の遺跡が集中することが発掘調査により明らかになっており、城久遺跡群と対照的な消長を示す状況が注目されている。

I 期からⅢ期にかけての出土量はごくわずかである。IV a 期ではⅢ期の 4 倍近い量に増加する。青磁碗 D1 類が主体で、白磁碗ピロースクタイプⅢ類が少量出土している。IV b 期はさらに増加し、

青磁碗 D2 類と C2 類が主体である。V 期には激減し、VI 期の貿易陶磁は確認できない。

②……………先島諸島の貿易陶磁にみる画期と様相

(1) 先島諸島における画期

先島諸島の貿易陶磁出土量の推移を全体的に概観すると、いずれも I・II 期は少なく、III 期から IV a 期にかけて増加することで一致している。また、住屋遺跡をのぞいては、いずれの遺跡も VI 期のものはないか、ごく少量である。

一方で、IV b 期以降の消長は異なる 2 つのパターンがみられる。1 つは住屋遺跡・フルスト原遺跡 1～3、15 号石罫のように V 期にむけて増加し、VI 期で減少または消滅するパターンである。採集資料の古見海岸一帯の出土傾向もこの事例に含めることができる。もう 1 つはミヌズマ遺跡・フルスト原 5 号・10 号石罫、新里村遺跡のように IV b 期から減少するパターンである。

以上の出土傾向から、先島諸島における貿易陶磁出土傾向からとらえられる画期として、III 期の始まり = 13 世紀後半、IV a 期の始まり = 14 世紀後半、IV b 期の始まり = 15 世紀前半、V 期の終わり = 16 世紀初頭～前半の 4 つを想定することができる。ただし、V 期については、全体として染付の出土量が少ないことから、住屋遺跡をのぞいては、16 世紀代まで続かない可能性も考えられる。これらの画期を踏まえて、先行研究を参照しながら、先島諸島における貿易陶磁の各時期の様相について述べてみたい。

(2) 貿易陶磁出現期の様相

11 世紀から 12 世紀前半にかけて、琉球列島では白磁碗 IV 類・カムイヤキ・滑石製鍋のセットが流通することが知られている。また、11 世紀代の琉球列島は、いわゆる「グスク時代」の萌芽期であり、農耕社会への転換がはかられ社会の変化も伴う画期となる時代である。考古学の視点からは、上記のセットや土器・滑石製石鍋の出土状況から、「南海産物の調達を目的とした、新たな交易圏の成立」[池田 2012] や、「(博多を中心とした) 中世的商品流通の経済圏内に琉球列島全域が参入した」[新里 2018a] など、流通・交易の面でも大きな変革期との指摘がなされている。しかし、今回行った貿易陶磁の数量分析では、白磁碗 IV 類・カムイヤキ・滑石製石鍋のセットが琉球列島で均一に流通していたか疑問が生じている。

先島諸島における白磁碗 IV 類の出土量はきわめて少なく、琉球列島北部の喜界島と比較すると、その差は歴然としていることが今回の数量比較で明らかになった。たとえば、喜界島の白磁碗 IV 類の出土数は、大ウフ遺跡で 76 点であるのに対し、宮古島の住屋遺跡では 2 点、ミヌズマ遺跡では 29 点、石垣島新里村遺跡では 13 点にすぎない。また、ジョージ・H・カーの採集資料の中にも、白磁碗 IV 類はほとんど含まれていない。今回の調査した遺跡以外では、宮古島砂川元島遺跡 [城辺町教育委員会 1989a]、同高腰遺跡 [城辺町教育委員会 1989b]、石垣島ビロースク遺跡 [石垣市教育委員会 1983] など白磁碗 IV 類の出土が報告されているが、いずれも出土数は少ない。また、白磁碗 IV 類・カムイヤキ・滑石製鍋がセットで出土しているのは、住屋遺跡と、刊行された報告書を参照する範

圃では大浜泊貝塚遺跡〔沖縄県教育委員会 1986〕のみである。

本稿でⅠ期とした11世紀後半～12世紀前半の貿易陶磁の出土状況については、中世前半の琉球列島の貿易陶磁出土遺跡・出土量を検討した新里亮人の研究がある〔新里 2018b〕。新里の提示したデータは、白磁碗Ⅳ類に限定していないが、Ⅰ期（基準資料白磁Ⅳ～Ⅵ類）とした11世紀後半～12世紀前半の遺跡数、出土数は、奄美諸島 15 遺跡・480 点、沖縄諸島 10 遺跡・328 点、先島諸島 6 遺跡・34 点である⁽⁹⁾。また、同じく新里の示したデータからカムイヤキの出土した遺跡数を見ると、奄美諸島 90 遺跡、沖縄諸島 241 遺跡、先島諸島 57 遺跡である。同様に滑石製石鍋および滑石混入土器の出土遺跡は、奄美諸島 42 遺跡、沖縄諸島 37 遺跡、先島諸島 5 遺跡であり、奄美・沖縄諸島と先島諸島では大きな差が生じている⁽¹⁰⁾。このように、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島の順で北から南に向けて減少している状況については、すでに新里が指摘し、「琉球列島が博多を中心とした中世商業圏に取り込まれることに起因する琉球圏の成立期」と結論づけている〔新里 2018c〕。

今回の数量分析と新里の分析は基準が異なるものの、Ⅰ期における先島諸島と沖縄諸島以北の貿易陶磁の出土状況は大きく異なることが明らかとなり、新里と同様の見解に至っている。次段階のⅡ期の貿易陶磁も少ないことを考慮すれば、Ⅰ・Ⅱ期の先島諸島においては、奄美諸島や沖縄諸島と同様な貿易陶磁の安定かつ継続的な流通が行われていなかったと考えられる。また、今回の採集資料や上記の新里のデータから、先島諸島全体に白磁碗Ⅳ類・カムイヤキ・滑石製石鍋が分布していたとは言い難く、点的な分布であったことを指摘できる。この事象から先島諸島におけるムラの成立が、沖縄諸島以北とは異なる可能性も生じてくるだろう。

なお、白磁碗Ⅳ類と同時期に日本列島に流入した白磁碗Ⅱ類が、先島諸島においては1点も出土していないことにも留意しておきたい。白磁碗Ⅳ類・ⅢⅡ類が福建産（系）、白磁碗Ⅱ類・ⅢⅣ類が広東産（系）と産地が異なることから〔田中 2016〕、11世紀における貿易陶磁の琉球列島への流入経路などについて、今後は沖縄諸島における実態を踏まえて検討すべき課題といえよう。

(3) 13～14世紀の白磁の様相

Ⅲ期になると、今回分析した先島諸島のいずれの遺跡でも、貿易陶磁の出土量が急増する傾向を確認することができた。また、これらⅢ期の貿易陶磁のほぼすべてを白磁が占めていることは特徴的である。具体的には、浦口窯系、ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類であり、浦口窯系とビロースクタイプⅡ類の出土量がとくに多い。

この傾向が顕著なのは宮古島で、住屋遺跡ではⅢ期の白磁碗のうち浦口窯系が51%、ビロースクタイプⅡ類が42%、ミスズマ遺跡では浦口窯系が25%、ビロースクタイプⅡ類が70%という出土状況である。その一方、この時期に九州・瀬戸内地域・本州で大量に出土する白磁碗・ⅢⅣ類はごく少量の出土にとどまっている。また、同様に日本列島全体に分布する青磁碗BⅠ類・BⅡ類がほとんどないことと連動しているように思われる。

このような13世紀後半から14世紀前半にかけての琉球列島における、白磁の出土状況について、新里が「特異な分布状況」として注目している〔新里 2018b〕。新里の分析によれば、「今帰仁タイプ」は奄美諸島では皆無で、最も出土量の多いのが沖縄諸島、次いで八重山諸島、宮古諸島の順である。ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類も、奄美諸島で少量の出土が確認できるようになるが、出土量の

順序は変わらない。ピロースクタイプⅢ類の時期になると、奄美諸島が増加するのに対し、先島諸島では遺跡数は変わらないが出土点数が減少するという状況があり、白磁碗・皿Ⅸ類との対比も含め、「先島諸島と奄美諸島では、沖縄諸島を挟んで対照的な状況を確認できる」と述べている⁽¹²⁾ [新里 2018b]。

田中も新里と同様の出土状況を確認した上で、「13世紀後半を境にそれまで形成されていた九州と琉球列島を繋ぐ大きな国内流通圏とは別に、沖縄諸島から先島諸島にかけて、琉球列島を巡る流通圏が形成され、今帰仁タイプ・ピロースクタイプは、この中で消費された製品」と指摘し [田中 2009b]、さらに今帰仁タイプ、ピロースクタイプⅠ・Ⅱ類とⅢ類の先島諸島・沖縄諸島の出土量の差異に着目し、生産地との地理的關係により、「今帰仁タイプ・ピロースクタイプⅠ・Ⅱ類は、福建から八

重山・宮古諸島、さらに沖縄諸島へと北上する交易ルートによって運ばれた可能性」を指摘している。また、九州から運びこまれる白磁碗・皿Ⅸ類との相関関係により、「13世紀後半～14世紀前半における二つの交流圏」(図13) [木下 2009] が示されている。新里はこれら白磁の消費状況の地域差、搬入経路の多様化、および消費量の増加について、「需要の拡大とともに新たな入手ルートを開拓する在地集団の動きを反映している」と述べている [新里 2018b]。

以上、田中、木下、新里が指摘している、13世紀後半～14世紀前半の白磁の出土量の地域差については、今回の分析で数量的にも明確となり、再確認したといえる。流通圏の境界や流入経路については、北と南の異なる分布状況が交差する沖縄諸島における数量的な分析等を行った上で再検討する必要がある。

(4) 14～15世紀の白磁と青磁の逆転現象

Ⅳa期になるといずれの遺跡でも出土量が増加し、そのほとんどを青磁が占めるようになる。これに対し、白磁は少量のピロースクタイプⅢ類が入る程度で、Ⅲ期からⅣa期にかけて白磁と青磁の逆転現象が起きる。

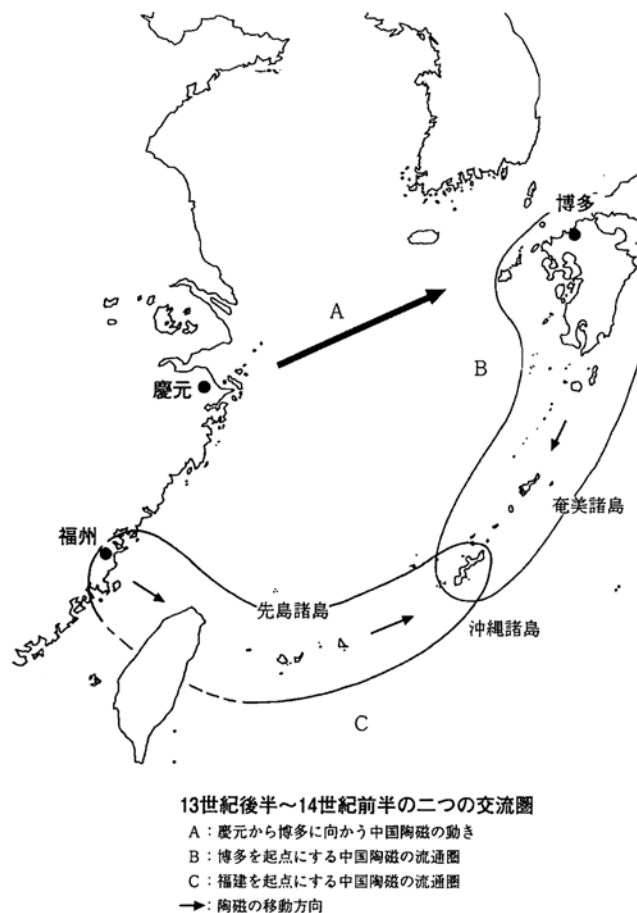


図13 13世紀後半～14世紀前半の二つの交流圏
(木下2009より)

前項でも述べたが、先島諸島ではビロースクタイプⅢ類の激減が顕著に認められる。たとえば、住屋遺跡では、ビロースクタイプ0～Ⅱ類が135点に対し、ビロースクタイプⅢ類は48点、ミスズマ遺跡では、同様に310点に対し24点、フルスト原遺跡では471点に対し163点、新里村遺跡では133点に対し57点と、いずれも3分の1から10分の1程度に激減している。一方で、奄美諸島の大ウフ遺跡では、ビロースクタイプⅡ類が6点からⅢ類16点に、中増遺跡ではビロースクタイプⅠ・Ⅱ類はなく、Ⅲ類が9点出土している。今回の調査でも、琉球列島の北と南で対照的なビロースクタイプの出土状況が確認できた。また、ビロースクタイプⅢ類は九州・瀬戸内・本州日本海側で広く分布する状況が指摘されており、先島諸島の特異性がいっそう際立つ構図である。

それでは急増する青磁の出土量はどうかであろうか。Ⅲ期とⅣa期を数値で比較してみると、住屋遺跡ではⅢ期69点・Ⅳa期429点（いずれも均等分加算数値、以下同）、ミスズマ遺跡ではⅢ期3点・Ⅳa期596点、フルスト原遺跡ではⅢ期70点・Ⅳa期1,775点、新里村遺跡ではⅢ期6点・Ⅳa期499点となり、6倍～200倍近い増加傾向を示す。これら大量の青磁のうち、出土量の80%以上を碗D1類が占めることも特徴的である⁽¹³⁾。また、この段階では、青磁の皿や盤類の出土も一定量確認できるようになる。

(5) 15～16世紀の様相

Ⅳb期・Ⅴ期もひきつづき青磁碗が出土量の大半を占める。Ⅳb期は青磁碗D2類が主体を占め、B3類・C2類が少量伴う状況である。また、白磁は青磁に比べて少ないものの、Ⅳa期より増加する遺跡が多く、B群の皿または小杯が出土している。

Ⅴ期には、青磁碗E1類とB4類があるが、これらの割合は遺跡ごとに異なる傾向が見受けられる。たとえば、住屋遺跡では碗B4類が約7割を占めるが、他の遺跡ではB4類とE1類の出土量にあまり差はなく、ほぼ半々の出土状況が確認できる。Ⅳb期でD2類が圧倒的に多い状況とは若干異なっている。また、これらの青磁のうち、Ⅳa期からⅤ期にかけて、次第に粗製の碗・皿が増加する傾向もある⁽¹⁴⁾。

染付はⅣb～Ⅴ期を通じて非常に少ない。今回の調査例では住屋遺跡と古見海岸一帯の採集資料で一定量みられる他は、いずれも10点未満である。染付の流入経路や遺跡の質的な変化などが考えられるが、現在は明確な要因が見出せていない。なお、Ⅵ期には住屋遺跡をのぞき、ほぼすべての遺跡で出土量が激減して少量となるか、まったく出土がみられない事例が多い。

Ⅳa期に急激に増加し、Ⅴ期まで圧倒的な量を占める青磁の先島諸島への流入経路については、現在のところ明確になっていない。ただし、沖縄諸島においても14世紀後半以降に青磁が増加する状況が指摘されている。たとえば、那覇市渡地村跡の調査では、青磁碗・皿の膨大な出土量が注目された。2007年の沖縄県教育委員会の調査では、わずか372㎡の調査区で、青磁が6,034点出土し、そのうち大半が15世紀後半から16世紀代のものである〔沖縄県立埋蔵文化財センター2007〕。また、隣接する那覇市教育委員会の調査区では、14世紀後半から15世紀の青磁集中部2箇所、15世紀後半から16世紀前半の青磁集中部6箇所、計6,553点出土している〔長堂・島2015〕。このように、15～16世紀の沖縄諸島にはきわめて大量の青磁が運びこまれていることは明らかであり、先島諸島における青磁の増加も沖縄諸島と連動する可能性が高い。

最後に、すべての時期に共通するが、先島諸島においては、今回調査した範囲では、青白磁が1点も確認されていない⁽¹⁵⁾。また、I～III期において白磁四耳壺・青白磁梅瓶・合子など瓶類や袋物がほとんどなく、ほぼ碗・皿のみという傾向が見える。IV a期以降においては、住屋遺跡・フルスト原遺跡・新里村遺跡で青磁瓶類・壺・酒会壺・香炉・花生などが見られるが、遺跡によりその差も顕著であり、沖縄本島に比べると少ないように見受けられる。今後、具体的な数量比較を行い、所謂「威信財」に対する価値観の差異や流入経路についても検討が必要である。

③……………貿易陶磁からみるムラの成立と終焉に関する課題

前項まで先島諸島における貿易陶磁の消長と画期について述べてきた。今回提示した画期は、あくまでも貿易陶磁の出土様相から設定できるものである。ムラの成立・変遷を明らかにするためには、他の要素、土器の出土量や変遷、遺構の状況、遺跡の立地なども検討していかなければならない。とくに、先島諸島で顕著にみられる「細胞群のように連結する石垣による屋敷割」[小野1999]のムラの出現時期は重要な課題である。本稿ではそれらについて総体的に分析する段階には至っていないが、貿易陶磁の数量分析により見出された画期と先島諸島のムラの成立・変遷について、先行研究のいくつかを整理・比較し、課題の抽出を行いたい。

先島諸島の本格的な集落研究は、竹富島新里村遺跡の発掘調査により具体的な遺構が検出されたことにはじまる[沖縄県教育委員会1990]。その後、国立歴史民俗博物館の特定研究で波照間島のマシク村遺跡、竹富島のハナスク・クマラ村遺跡等の測量調査が行われ、先島諸島で特徴的な「石垣」に囲まれたムラの姿が明らかになった⁽¹⁶⁾[小野1999]。

小野正敏は上記の遺跡のほか、宮古島の上比屋山遺跡、オイオキ原遺跡などを取りあげ、共通する集落の形態として、ムラの中に道路がなく、「石垣」による大きさの不均衡な不規則な屋敷区画であること、また、これらの屋敷区画が細胞状に連結し、「石垣」の一部を切り取った出入り口によって結ばれていること、などを挙げている[小野1999・2010]。これらのムラは、海岸に面した隆起珊瑚礁の崖の上や、段丘上に立地することが多く、崖に沿う水脈を利用した井戸を伴っているという共通性をもつ。ムラの年代は新里村の発掘調査成果や遺跡の地表で採集された陶磁器から、14世紀後半から15世紀末頃に営まれたとする⁽¹⁷⁾。

小野は先島諸島におけるムラを次の4段階に設定した。I期は12世紀末～13世紀、「石垣」による屋敷区画がないムラで新里村遺跡東村を想定した。II期は14世紀後半～16世紀、「石垣」による屋敷区画が出現する。とくに15世紀前～中葉が中心となるムラが多い。III期は17・18世紀で、発掘調査がなされていないため詳細は不明。IV期は現集落に直接つながる井然型村落と呼ばれるもので、竹富島や波照間島で現在も見ることができる。これに加えて、小野の論考はこれらのムラと現在の御嶽との関係、地上に残らなかったムラと移動、聖地としての土地の記憶、琉球国との政治的関係などに及んでいるが、本稿ではこれらについては考察する準備がないため、記述は割愛する。

金武正紀は新里村遺跡の発掘調査成果をもとに八重山諸島の集落形態についてまとめている[金武1999・2015a・b]。ムラの形状や構造については、小野の示した特徴を踏襲しているが、屋敷地の中に複数の建物が存在すること、ムラに収穫物を保管する高倉や共同井戸をもつことなど、個々の

構成要素にも言及している。新里村遺跡以外の同様の構造のムラとして、石垣島ピロースク遺跡、竹富島花城村遺跡、波照間島マシク村遺跡などを挙げている。そして、これらのムラの構造が14世紀に成立し、現在の先島でも一部景観が継承されていることを指摘している。

久貝弥嗣は、貿易陶磁や土器の出土状況から、宮古諸島の中世集落を第1期（11・12世紀～13世紀中頃）、第2期（13世紀後半～15世紀前半）、第3期（15世紀中頃～16世紀）の3時期に区分した上で、存続年代や立地から「住屋タイプ」、「高越タイプ」、「元島タイプ」の3つの遺跡のタイプに分類した〔久貝2014a・b〕。「住屋タイプ」は第1期から第3期を通して貿易陶磁が出土する継続的な遺跡である。「高越タイプ」は第1期の遺物は少なく、第2期で盛行期をむかえるが第3期には存続しない遺跡である。丘陵上に立地する遺跡が多く、「石積遺構」を有する特徴がある。「元島タイプ」は第1・2期の遺物を少量含むものの、第3期が中心となる遺跡である。比較的標高の低い海岸近くに立地し、近世まで集落が存続するが、現在の集落とは位置がやや異なることが特徴である。現集落の移動前の集落という理解がされている。

また、久貝は第2期をさらに2分し、白磁を主体とする13世紀後半～14世紀中頃と、青磁を主体とする14世紀後半～15世紀前半とし、第2期前半である13世紀後半～14世紀前半に画期を見出している。また、「高越タイプ」の遺跡が衰退し、「元島タイプ」の遺跡が盛行する15世紀前半～中頃にも画期を設定し、13世紀から15世紀前半にかけては独自性が濃い、15世紀中葉以降は沖縄諸島との関係が強くなると指摘している。

本稿で想定した4つの画期のうち、Ⅲ期の始まり（＝13世紀後半）と久貝の第2期の始まり、Ⅳa期の始まり（＝14世紀後半）と久貝の第2期後半が一致する。Ⅳb期の始まり（＝15世紀前半）と、「元島タイプ」のムラが盛行する久貝の第3期（15世紀中葉）は若干時期差がある。八重山諸島の遺跡で貿易陶磁が極端に減少するⅤ期の終わり＝16世紀初頭～前半については、宮古島では「住屋タイプ」のムラが継続していることから状況が異なる。つまり、宮古諸島と先島諸島を比較すると、11世紀～14世紀はほぼ同様の状況であるが、15世紀以降は様相の違いが確認できる。これは、久貝も指摘しているように、沖縄諸島からの地理的・政治的な影響の時間差の可能性が考えられる。

今回の貿易陶磁の分析、画期の設定により、先島諸島全域におけるムラの形成は13世紀後半以降に段階的に始まったと想定される。さらにムラの変遷で最も重要な問題は、先島諸島で特徴的な「細胞群のように連結する石垣による屋敷割」のムラの出現時期である。小野、金武ともにその時期を14世紀代と指摘しているが、いずれも新里村遺跡における「石垣」のない東のムラと「石垣」に囲まれた屋敷の西のムラの時期差に基づくものである。しかし、今回の陶磁器の数量分析では、数の差はあれ、東のムラと西のムラの出土傾向にはほとんど差が認められず、必ずしも「石垣」のない東のムラが古いとはいえない状況が確認された。「石垣」を伴うムラの成立については、他の遺跡の遺物出土状況を含め再度精査する必要性が生じている。今回の調査によって、新里村遺跡やフルスト原遺跡など「石垣」・「石塁」のある遺跡において、Ⅳa期の陶磁器が安定的に出土することが確認できた。このことから、14世紀後半以降にはこれらのムラが存在していた可能性は高いと考えられるが、出現時期については再度検討が必要である。また、浦口窯系・ピロースクタイプⅠ・Ⅱ類など福建産粗製白磁が大量に流入した13世紀後半～14世紀前半についても、ムラの具体的な姿を描

けるかの検討が求められる。

ムラの終焉については、前述のように住屋遺跡・古見海岸一帯以外の遺跡ではⅥ期の資料がほとんどないことから、16世紀初頭には終焉をむかえ、消滅したか、別地点へ移動していたと想定される。小野は1500年のアヤケアカハチの乱を契機として、八重山諸島のムラが再編された可能性を指摘している〔小野1999〕。ムラは存続していても、貿易陶磁の流入が途絶えた可能性もあり、土器等の他の出土遺物の検討も必要である。ここでは、存続、消滅、移動など、中世末の多様なムラの変容を確認するにとどめたい。

おわりに 課題と今後の展望

本稿では、先島諸島の主な遺跡の貿易陶磁の数量分析に基づき、それぞれの出土様相から導き出される4つの画期を確認した。また、奄美諸島、沖縄諸島と異なる先島諸島の地域的な特徴も見えてきた。これまで琉球列島一括りの陶磁器様相で語られることが多かったが、先島諸島には時期により変化する地域的な様相があり、また、それが先島諸島特有のムラの形成につながる可能性もある。しかしながら、今回の調査・分析だけでは解決できない課題も明らかとなった。

課題の1つ目としては、先島諸島にもたらされた貿易陶磁の流入経路である。Ⅲ・Ⅳa期の福建産粗製白磁については、先行研究〔木下2009、新里2018b〕を参照し、ある程度見通しが立つ。しかし、Ⅳa期に急増する青磁碗・皿の流入経路については、未解決である。これらについては、同様の分析を沖縄諸島でも行い、画期や様相を明らかにした上で、先島諸島や奄美諸島との比較を行う必要がある。地域ごとの画期や様相を明確にし、琉球列島全体の貿易陶磁の流通状況、流入経路を考えてみたい。

2つ目の課題としては、遺跡における陶磁器出土様相や画期と先島諸島のムラの成立・形成過程との関連づけである。すでに調査されているムラの遺構の変遷、遺物の出土状況・層位を再度精査する必要がある。さらには、沖縄諸島や奄美諸島のムラの形成、大型グスクの形成との関連にも目を配っていきたい。

註

(1)——2015年度から2017年度国立歴史民俗博物館共同研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」、2014年度から2017年度科学研究費助成事業基盤B「琉球帝国と東アジア海域の動態研究－集落・流通・技術－」、研究代表村木二郎。

(2)——本誌「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」参照。

(3)——白磁碗・皿の今帰仁タイプおよびビロースクタイプは、琉球列島を中心に広く分布する福建産粗製白磁の一群であり、近年の研究により、今帰仁タイプは福建省浦口窯、ビロースクタイプは福建省閩清窯の製品であることが明らかになっている〔宮城2009、田中2009a・

2016〕。今回の調査では、従来の型式設定による今帰仁タイプの範疇には当てはまらない製品が多数みられ、また、それらは宮城が浦口窯製品として紹介した資料と同様のものという認識から、今帰仁タイプを含めて浦口窯系と一括して提示した。

(4)——田中が閩清窯の製品と日本出土のビロースクタイプとを比較する中で、ビロースクタイプⅠ類に先行するものとした一群を「報告」および本稿ではビロースクタイプ0類とした。田中によれば、ビロースクⅠ類先行タイプの特徴は、ビロースクタイプⅠ類に比べて内底径が小さく、①浅く段が付く、②圏線がある、③凸状に小

さくふくらむ、などの特徴がある。また、内底を輪状に釉剥ぎするものがみられ、外面高台付近際まで施釉されている点もビロースクタイプとは異なる。

(5)——先島諸島の集落遺跡でみられる石を積んだ区画遺構に関しては、報告書や報告者により、「石垣」、「石罫」、「石積遺構」等、複数の名称が使われている。現状では明確な定義や分類等がないため、本稿では報告書・報告者の使用する名称を、遺構名をのぞきカッコ書きで記した。

(6)——フルスト原遺跡は、史跡確認調査のためそれぞれの「石罫」をすべて全面的に調査しているわけではなく、「石罫」ごとの調査範囲・層位に差がある。石垣市教育委員会金城由美氏のご教示による。フルスト原でみられるパターンの違いが、「石罫」を構築・使用した時期の差によるものかについては、近々刊行される報告書を見て再検討したい。

(7)——沖縄県立埋蔵文化財センターに所蔵されていた新里村遺跡の資料のうち、報告書掲載以外の破片については、東西の村に分けた状態で収納されていなかったため、注記と報告書のグリッド図を対照し、東遺跡と西遺跡に分類して集計した。

(8)——本誌「沖縄県竹富町波照間島ミシユク村跡遺跡の調査」に掲載。

(9)——新里 2018b 表 22 より集計した。新里の提示した出土点数は、報告書集計表、実測図掲載数、点数不明など、統一した基準で抽出していないため、遺跡によりばらつきが生じている可能性があり、すべて実見し計数した本報告のデータとは異なる場合がある。

(10)——新里 2018f 付表 4 より集計した。付表 4 は 2002 年度までのデータである。

(11)——新里 2018d 付表 1 より集計した。付表 1 は 2001 年度までのデータである。なお、滑石製石鍋および滑石混入土器のデータとしては、宮城弘樹の集計がある [宮城 2015]。これによれば、奄美諸島 31 遺跡・2,641 点、沖縄諸島 48 遺跡 1,022 点、先島諸島 3 遺跡・3 点で

ある。

(12)——新里 2018e 付表 3 のデータによれば今帰仁タイプの出土遺跡・出土点数は奄美諸島 0 遺跡・0 点、沖縄諸島 12 遺跡・114 点、宮古諸島 7 遺跡・12 点、八重山諸島 8 遺跡・51 点である。同様にビロースクタイプ I・II 類は、奄美諸島 1 遺跡・4 点、沖縄諸島 50 遺跡・396 点、宮古諸島 8 遺跡・38 点、八重山諸島 11 遺跡・139 点、ビロースクタイプ III 類は、奄美諸島 2 遺跡・22 点、沖縄諸島 65 遺跡・2,028 点、宮古諸島 7 遺跡・22 点、八重山諸島 15 遺跡・111 点である。付表 3 は 2008 年度までのデータである。

(13)——今回の分類では、本稿の青磁碗 D1 類に、口縁下に弦文が巡るものや、内外面に蓮弁文などの文様が施されるものも含めている。小破片を分類・集計するため、あえて別に分類項目をつくることはしなかった。明らかに文様が確認できたものについてカッコ書きで文様名を加えた。瀬戸哲也は、青磁碗の分類・編年において、上田分類 [上田 1982] の D-I, B-I', C-I を IV 類とし、外面の文様により、0 無文, 1 蓮弁文, 2 横帯文 (雷文等) とし、14 世紀中～後半に位置づけている (瀬戸 2010)。その後、IV 類を IV 類古相と IV 類新相に細分している [瀬戸 2015, 2017]

(14)——「粗製」の概念について厳密な基準を設けることはできなかったが、①胎土が不良、②釉調が悪い、もしくは釉掛けが不適切、③焼成不良、④高台等整形が雑で簡略化している、などの製品を粗製とした。

(15)——宮古島高腰城跡、野城遺跡で青白磁が確認されている [城辺町教育委員会 1987, 1989b]。

(16)——1993～1995 年度、国立歴史民俗博物館 特定研究「列島内相互交流の研究 奄美・沖縄の文化とその展開」

(17)——宮古島における「石垣」のある屋敷区画の成立はもう少し遡り 13～14 世紀に成立した可能性を示唆する。

引用・参考文献

- 池田榮史 2006 「琉球における中世貿易陶磁の様相」『九州史学』第 144 号 九州史学会
池田榮史 2012 「琉球国以前—琉球・沖縄史研究におけるグスク社会の評価をめぐって—」『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館
石垣市教育委員会 1983 『ビロースク遺跡』
石垣市教育委員会 1984 『フルスト原遺跡発掘調査報告書』
上田秀夫 1982 「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
沖縄県教育委員会 1986 『下田原貝塚・大泊浜貝塚』

-
- 沖縄県教育委員会 1980『竹富町・与那国町の遺跡』—詳細分布調査報告書—
沖縄県教育委員会 1990『新里村遺跡』
沖縄県教育委員会 1994『ぐすく』グスク分布調査報告書(Ⅲ)—八重山諸島—
沖縄県立博物館 1982『沖縄出土の中国陶磁(上)』—ジョージH・ケア氏調査収集資料—先島編
沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡』
沖縄県立埋蔵文化財センター 2009『沿岸地域遺跡分布調査概報(Ⅱ)～宮古・八重山諸島編～』
小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会)
小野正敏 1985「出土陶磁器からみた15・16世紀における画期の素描」(『MUSEUM』No.416)
小野正敏 1991「沖縄県黒島採集の陶磁器」『環境に関する民俗的認識と民俗技術的適応』平成3年度科学研究費補助金(一般B)研究成果報告書
小野正敏 1999「密林に隠された中世八重山の村」『村が語る沖縄の歴史』国立歴史民俗博物館編 新人物往来社
小野正敏 2010「第六章 先島の集落」『沖縄県史 各論編 第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会
喜界町教育委員会 2013『城久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡』
喜界町教育委員会 2015a『城久遺跡群 —総括報告書—』
喜界町教育委員会 2015b『中増遺跡Ⅰ』
木下尚子 2009「総括」『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部
金武正紀 1988「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』No.8
金武正紀 1989「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号 沖縄県立博物館
金武正紀 他 1991『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会
金武正紀 1999「再発見された八重山の古集落」『村が語る沖縄の歴史』国立歴史民俗博物館編 新人物往来社
金武正紀 2015a「第三章 八重山の歴(原)史時代」『石垣市史』各論編 考古
金武正紀 2015b「特論5 八重山の古村落—竹富島新里村遺跡の発掘調査を中心に」『石垣市史』各論編 考古 石垣市教育委員会
久貝弥嗣 2014a「宮古のグスク時代の展開における一考察」『南島考古』第33号
久貝弥嗣 2014b「宮古諸島のグスク時代の中国産陶磁器」『琉球列島の貿易陶磁』第35回日本貿易陶磁研究会(沖縄大会)発表要旨・資料集 日本貿易陶磁研究会
久貝弥嗣 2015「ミズズマ遺跡の発掘調査もたらした宮古のグスク時代の新展開と今後の展望」『琉大史学』第17号 琉球大学史学会
城辺町教育委員会 1987『大牧遺跡・野城遺跡』
城辺町教育委員会 1989a『砂川元島』
城辺町教育委員会 1989b『高腰城跡』
コルネリウス・アウエハント 2004『HATERUMA』榕樹書林
下地 傑 1999「発掘された村・石垣島フルストバル村」『村が語る沖縄の歴史』国立歴史民俗博物館編 新人物往来社
新里亮人 2018a「第3章 舶来煮沸具の受容」『琉球国成立前夜の考古学』同成社 初出は2002「滑石製石鍋の基礎的研究」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』熊本大学文学部, 2008「琉球琉球列島出土の滑石製石鍋とその意義」『日琉交易の黎明』森話社
新里亮人 2018b「第4章 舶来供膳具の受容」『琉球国成立前夜の考古学』同成社 初出は2009「九州・琉球列島における14世紀前後の中国陶磁と福建産白磁」『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部, 「琉球列島の中国陶磁器—11～14世紀を中心に—」貿易陶磁研究 No.35 日本貿易陶磁研究会
新里亮人 2018c「第8章 食器類からみたグスク時代の歴史動向」『琉球国成立前夜の考古学』同成社 初出は2014「先史時代からグスク時代へ—その考古学上の諸画期と歴史的展開」『琉球列島先史・原始時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究—』六一書房, 2018「遺跡出土食器類から考えるグスク時代の琉球列島社会」『奄美・沖縄諸島先史学の最前線』南方新社
新里亮人 2018d「付表1 九州島・琉球列島における滑石製石鍋出土遺跡一覧」『琉球国成立前夜の考古学』同成社
新里亮人 2018e「付表3 琉球列島における福建産粗製白磁出土遺跡一覧」『琉球国成立前夜の考古学』同成社
新里亮人 2018f「付表4 カムイヤキ出土遺跡一覧」『琉球国成立前夜の考古学』同成社
瀬戸哲也 2010「沖縄における12～16世紀の貿易陶磁」『貿易陶磁研究』No.30 日本貿易陶磁研究会
瀬戸哲也 2015「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁について」『貿易陶磁研究』No.35 日本貿易陶磁研究会
瀬戸哲也 2017「沖縄出土貿易陶磁器の時期と様相」『貿易陶磁器研究の現状と土器研究』第35回中世土器研究会資料
-

集 日本中世土器研究会

- 瀬戸哲也 2018 「沖縄本島におけるグスク時代の階層化」『考古学研究』第 65 巻第 3 号 考古学研究会
田中克子 2009a 「ピロースタイプに関わる窯跡とその製品」木下尚子（編）『13～14 世紀の琉球と福建』
田中克子 2009b 「生産と流通」木下尚子（編）『13～14 世紀の琉球と福建』
田中克子 2016 「日宋貿易期における博多遺跡群出土中国陶磁器の変遷と流通」『中近世陶磁器の考古学』第三巻 雄
山閣
中世学研究会 2019 「座談会 中世の琉球」『琉球の中世』高志書院
長堂綾・島弘 2015 「渡地村跡の概要と青磁集中部」『貿易陶磁研究』No.35 日本貿易陶磁研究会
平良市教育委員会 1999 『住屋遺跡（I）』
宮城弘樹 2009 「今帰仁タイプに関わる窯跡とその製品」木下尚子（編）『13～14 世紀の琉球と福建』
宮城弘樹 2015 「南西諸島出土滑石製および滑石混入土器出土遺跡集成」『廣友会誌』8 廣友会
山本信夫 2000 『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会

（伊豆の国市教育委員会文化財調査員）

（2020 年 7 月 9 日受付，2020 年 10 月 16 日審査終了）

Dynamics of the Ceramics Trade and Issues Related to the Establishment of Villages on the Sakishima Islands

IKEYA Hatsue

This paper discusses the dynamics of the ceramics trade in the northern and southern parts of the Ryukyu Islands based on an analysis of the quantity of traded ceramics excavated from the Sakishima Islands and the Amami region. This paper also considers the fluctuations in the quantity of ceramic wares excavated from each site and the changes in classification. In a separate report, this period was classified into seven stages. Periods from one to six (I–VI) are based on the chronology of the ceramics trade and include the Shoki period. However, each ruin site was examined with reference to the classification of eras, and the following four transition eras in the Sakishima Islands were identified. Period one (I) encompasses the latter half of the 13th century and is characterized by an increase in the quantity of excavated ceramics. Period two (II) encompasses the latter half of the 14th century and is characterized by a further increase in the volume of excavated ceramics. In addition, during this period, the primary form of ceramic wares shifts from white porcelain to celadon. Period three (III) encompasses the latter half of the 15th century and is characterized by fluctuations in the quantity of excavated ceramic wares at each ruin site. Period four (IV) encompasses the first half of the 16th century and is characterized by a sharp decrease in the quantity of ceramics excavated at the majority of ruin sites.

An examination of aspects of traded ceramics in the Sakishima Islands during these transition eras reveals that the excavation period of traded ceramics predates the excavation of ceramics on the Okinawa Islands by over a century. Furthermore, from the latter half of the 13th century to the first half of the 14th century, the primary type of porcelain that was excavated was crudely manufactured white porcelain made in Fujian Province, including Uruguchi kiln white porcelain and types one and two of Birosuku porcelain. Also, in the latter half of the 14th century, the primary type of porcelain that was produced shows a dramatic shift from white porcelain to celadon.

The abovementioned transitional eras, as well as the nature of the traded ceramics in the Sakishima Islands, differ significantly from the aspects that have conventionally been associated with the Ryukyu Islands. It can be assumed that these transition eras and aspects are related to the establishment and formation of villages with “residential divisions based on Ishigaki stone walls connected like saibogun (cell groups),” which are characteristic of the Sakishima Islands.

Key words: Sakishima Islands, amount of trade ceramics excavated, Uraguchi kiln type of white porcelain, Birosuku type, Saibojo stone wall villages